



神戸郊外における場所意識 : 写真投影法による分析

大西, 昭彦

(Citation)

兵庫地理, 51:20-29

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002154>



神戸郊外における場所意識

—写真投影法による分析—

大西昭彦

1. はじめに

都市部への著しい人口集中は、都心から郊外への居住区拡大という圧力を生んだ。高度成長期にその動きは高まり、特に 1968 年に都市計画法が制定されて以降、農村部の開発が虫食いのように拡大した。その結果、郊外の丘陵地などが開発され、都市機能の一部を農村部に移植する形で、均質的な住宅地が造成されていくことになった。

神戸市域の郊外開発も 1970 年前後を境に急加速した。その規模やスピードは国内自治体のなかでも群を抜くものだった。神戸の大きな特徴は、行政主導による公共デベロッパー方式を採用したことである。そこには市域拡大を第一義とした戦前の「大神戸都市構想」(広原,2001)にみられるような強い成長志向がある。

しかし、地価上昇を前提とした神戸市の開発型都市経営は、90 年代入って破綻した。やがて地価下落にともなう都心回帰の流れとあいまって、郊外空間は従来の拡張一辺倒からコミュニティ構築が重要視されるなど新たな局面を迎えている。その背景には、社会的・経済的な要因とともに、居住者たちが郊外空間に抱く「場所」意識が大きな要素として関係していると筆者は考える。

本稿では、上記の問題意識に立ち、郊外空間を「生きられる空間」(ミンコフスキー,1972)として捉え、神戸の郊外住宅地を対象に居住者たちが抱く場所意識について調査・考察した。分析手法に「写真投影法」を用い、郊外居住者が空間をいかに認識してい

るかを視覚的なアプローチによって検証。さらに郊外住宅地の景観を通して「場所」との関連を探った。

分析にあたっては人文主義地理学をベースとし、歴史的空間ではない新たな空間を生きつつある郊外居住者の場所意識を考察する。これにより、郊外住宅地における場所生成の過程を探ることを目的とする。

2. 人文主義地理学と郊外空間

まずは本稿の基底となる人文主義地理学(humanistic geography)について、概観する。

これは数理的・実証主義的方法が唯一の科学的手法ではないとする立場から出発し、「空間を複雑な心象として理解し語りえないものを語る」(トゥアン,1988)として、人間の意識や内的世界を地理学に取り込む点に大きな特徴がある。その過程で「地理的知識の基礎は、私たちが自ら生活している世界についての直接経験と意識のうちに存在する」(レルフ,1991)との考えから、「経験」を大きなキーワードとした。また、ベルク(2002)は自らの地理学への姿勢を示して、「重要なのは、人間存在が大地にみずからの存在を刻み込んでいるという事実であり、逆にある意味では大地によって刻み込まれているということである。地理はまさに、この<意味>を問うのである」と語っている。

次に、人文主義地理学の視点から見た郊外観を整理しておく。

第一に、現代の郊外はその土地が刻んでき

た歴史的・社会的な文脈から遊離し、土地の履歴とは無縁の意匠をまとった空間となっている（履歴の抹消）。

第二に、職住が分離した住宅地として外部から隔離され、住宅地内でも公的空間と私的空間が峻別されるなど、二重の意味において空間の分断化がなされている（空間の可視的分断）。

第三に、土地開発により同質的な景観が生みだされていることに加え、居住者の多くが本来はその土地の外部者である（景観の同質化＋外来者としての居住者）。これを吉原（1993）は「同質性の神話が実は同調性の悪夢を呼び起こすという点に、サバーバニズム論のひとつの基本的特性をみることができる」としている。こうした特性は、郊外化（サバーバニズム）と観光化（ツーリズム）の類似としてとらえることができる。

3. 写真投影法

写真と風景が深い関係をもつことは、これまでも指摘されてきた（加藤,1990）。カメラに語りかける都市は、目に語りかける都市とは異なり、写真は都市の視覚的無意識を浮上させる（伊藤,1988）。いいかえれば、都市は写真という分身のうちに二重化されるとともに、写真のなかにおいてはじめてその欲望のかたちを可視化するのである（田中,2000）。すなわち写真と風景の関わりは、単に表面的な風景が写し撮られるだけではなく、写真によって世界が“風景化”される点に最も大きな特徴がある。

郊外住宅地の景観は 1990 年代半ば以降、写真家にとっても極めて重要な被写体として取りあげられてきた。総じて無機質で空虚な空間イメージを視覚化したものが多く、現代写真の一つの潮流をつくっている。興味深いのは、異なる地域を撮影した写真が、驚くほど似通った印象を残すことである。たとえば写真家ホンマタカシが撮影したアイスランド

の郊外写真は、同じく写真家の米田知子が撮った芦屋シーサイドタウンの写真とその印象が酷似している¹⁾。建物の外観が均質的であるとともに、地域全体を漂白したかのような没場所的な雰囲気がその特徴である。

こうした写真は 1970 年代半ば以降に登場した「ニュー・トポグラフィクス」²⁾と呼ばれる一群の写真家たちのスタイルをルーツとする。彼らは人工化されてゆく自然の領域に目を向け、その地理的空間を感情を排した客観的視線によって切り取った。そこには見慣れた日常空間に疑いの眼差しを向け、あらためてその空間の意味を問い直そうとする姿勢がある。現代の郊外写真にも、その姿勢を継承した眼差しがある。それをなしたのは空間の変容に向けられた写真家の鋭敏な感覚と同時に、物理的空間を“風景化”するという写真の特性があげられるだろう。その意味では、自明である日常空間をあらためて分析の対象とするうえで、写真は有効な装置となりうるといえよう。

さて、写真による分析手法は 1980 年代後半に、精神医学の立場から野田(1990)が採用している。子供たちが撮った写真からその内的風景を分析・考察し、これを「写真による環境世界の投影的分析方法」略して『写真投影法』と呼んだ。地理学が扱う写真投影法では、撮影者が空間を具象的な図像としていかに認識・貯蔵・伝達しようとしているかに目を向ける。空間認知のうえで精神分析学・心理学との違いは、より大きな空間スケールに目を向け、撮影プロセスよりも撮影パターンを重視し、how よりも what、where が問題となる点である。

本研究における調査では、撮影テーマを「私の暮らしている町」とし、郊外居住者に対して基本的にレンズ付きフィルム 1 本 (27 枚撮り) を各人に渡して撮影を依頼した。いわば写真による認知地図 (cognitive map) の作成であり、撮影者のなかにある空間イメージの

表象である。写真撮影に加えて、履歴や属性等の基本事項をフェイスシートに記入、あわせて撮影者に対して撮影後にヒアリングを実施し、より写真への理解を深める手法をとった。なお、比較検討素材として豊岡市農村部でも同様の調査を実施している。調査対象、属性は以下の第1表の通りである。

神戸市郊外<9人>	
成人男性(50-20)	成人女性(43-13)
大学生女子(22-7)	大学生男子(20-10)
大学生男子(19-11)	中学2年男子(14-13)
小学6年女児(12-12)	小学4年男児(9-9)
幼稚園女児(5-4)	
豊岡市農村部<3人>	
成人男性(33-3)	成人女性(33-3)
小学1年女児(7-3)	

第1表 調査対象者の属性

※括弧内は（年齢－撮影地での居住年数）

4. 郊外と農村の地域別写真特性

撮影された写真を見ると、いくつかの典型的なパターン（特徴）を見つけることができる。以下では、その特徴を①公的空間と私的空間の表現、②生活シーンの表現、③人物の表現、④時間軸の表現、⑤美意識の表現、⑥世界観の表現の6つの視点に整理して、写真を分析する。また、同じ視点によって、神戸市郊外と豊岡市農村部との比較を行なう。

1) 神戸市郊外の写真分析

最初に、神戸市郊外の写真の特徴を明らかにする。

i) 不可侵領域の撮影

立ち入り禁止の看板や金網など、居住区内の不可侵領域を示した写真がしばしば登場する（写真1）。ヒアリングにより、意識的に撮影しているとの回答があった。ほかに痴漢・強盗注意の看板も撮影され（写真2）、居住区内にある異質な空間の存在を感じさせる³⁾。

一方で、自身と関係の深い空間のみにこだわってそれを撮影している居住者も少なくない。プライベートな居住空間に加え、頻繁に訪れる空間がここに含まれる。自身の帰属する集団の行動領域や価値観が、撮影された空間にストレートに投影されている。

ii) 限定的な生活シーン

撮影された写真からは、多様な生活シーンをうかがい知ることにはできない。その理由として、郊外住宅地が生産システムをほとんど欠いた「再生産空間」⁴⁾（影山,2004）としてのみ機能していることがあげられる。そのため、社会的な生産活動は写真に登場せず、生活シーンの表現は単調なものとなっている。

iii) 人物表現の希薄さ

成人の場合は、総じて人物を撮影した写真が存在しないか、写っていても点景にすぎない⁵⁾。ここからうかがえるのは、「私の暮らしている町」というテーマに対して、意識的に

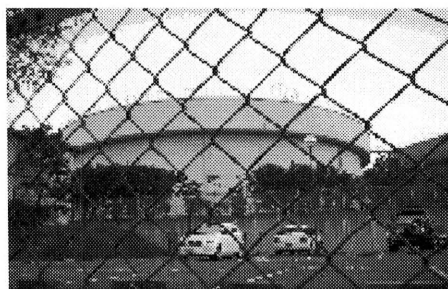


写真1 金網と貯水槽（小6女児撮影）



写真2 看板（女子大生撮影）



写真3 住宅（同左）



写真4 並木—自然美
(成人男性撮影)

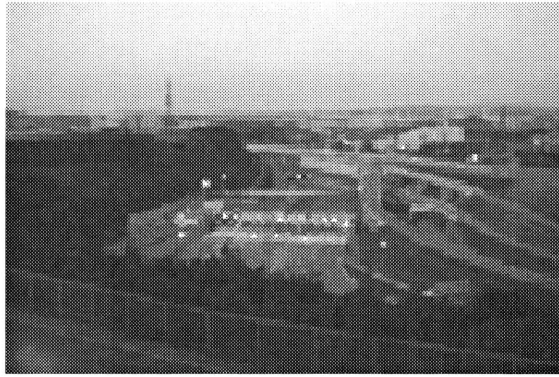


写真5 夕暮れ時の高速道路—人工美
(小6 女兒撮影)

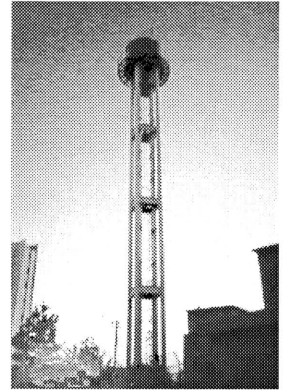


写真6 給水塔
(成人女性撮影)

せよ無意識にせよ他者としての人物が除外されているという事実である。

一方で、学生および児童が撮影した写真には、友人や家族の姿を数多く見ることができる。帰属集団を通して空間を意識している様子がうかがえる。ただし、自身の私生活に特化して撮影しているだけで、社会性や客観性は見出しにくい。

iv) 写真による時間の遡行

一部の撮影者は、現在の生活とは直接関係はないが、過去にプライベートでつながりがあった空間を撮影している。写真によって時間軸を遡り、自己検証的に空間（写真）が使われている。「経験」を拠り所として、場所意識が生成される様子がうかがえる。

v) 自然美・人工美の表現

居住区のイメージを視覚化するにあたり、植物の緑を撮影した写真が多く見られる（写真4）。緑が多いことを強調するケースと、撮影することで「あらためて緑の多さに気づいた」というケースがある。一方で、高速道路のライト、街灯、パステルカラーの建築物など、人工的な構造物を撮影した写真も多い（写真5）。ヒアリングでは、複数の撮影者が「きれいだから撮影した」と語っている。

vi) 不可解な存在の表現

貯水タンク、給水塔、山など生活するうえ

で直接的なつながりは意識していないが、視覚的に「気になる存在」だとして、これらがランドマーク的に撮影されている（写真6）。撮影者の意識のなかでは、撮影対象物（被写体）の機能を認識しているわけではなく、むしろ不可解な存在として撮影しているケースが多い。ここには居住区内でありながら、撮影対象物に向けられた「好奇の視線＝外部者の視線」を感じることができる。

2) 豊岡市農村部の写真分析

次に、豊岡市農村部の写真の特徴を明らかにする。

i) 公私の不可分

撮影された写真に不可侵領域を感じさせるものではなく、他者の敷地内でも撮影が行なわれている。プライベートな領域を厳格に意識させるものは少なく、写真上で公的空間と私的空間は不可分の状態である。

ii) 生産空間と再生産空間の共存

個人的につながりのある空間を撮影している点は、郊外居住者と同じだが、撮影された空間には多様な生活シーンが写しだされている。農村部では生産空間と再生産空間が共存しているため、仕事をしている他者の姿などが写真に登場する。公民館や神社など地域社会とかかわりのある建物（空間）も意識的に



写真7 集落内の公民館
(農村部一小1 女児撮影)



写真8 集落内の働く人
(農村部一成人男性撮影)

撮影されている(写真7)。これは郊外居住者の写真には見られなかったものである。

iii) 豊富な人物写真

家族の写真はもちろん、近隣の人々の姿が写真に登場する。野外で労働している姿が多いことも特徴である(写真8)。実際の風景のなかに人物が登場する頻度がきわめて少ない農村部の方が、かえって写真のなかに人物が多く登場するという結果になった。

iv) 希薄な時間的遡行

農村部居住者について、今回は同地での居住年数が短いこともあって、時間軸をさかのぼるような写真は見られなかった。

v) 自然美の表現

牛や犬などの動物、昆虫、植物、雪景色など自然の多様さ、四季の移ろいを感じさせる

写真が数多く見られる。

vi) 自明的世界

撮影者は撮影対象となった被写体を明確に意識し、それを撮影している。郊外写真に見られた不可解な存在のようなものはない。

5. 撮影者の属性別写真特性

前項では郊外と農村部にわけて、それぞれ写真の特徴を列挙した。しかし、郊外住宅地という空間にありながら、属性によってその空間の捉え方はかなり異なる。総じていえることは、撮影者のアイデンティティ(地域と自身とのつながり方)が写真に投影されていることである。

i) 成人男性

撮影者の子供が通った小学校、撮影者が子供と遊んだ場所など、子供と関連した空間を多く撮影している。子供を媒介とした地域社会との交流をうかがわせる。これは農村部より郊外居住者の写真に強く現われている。

また、郊外・農村部にかかわらず、社会的な視線が写真に反映されている。郊外居住者の場合は土地開発の歴史、農村部の場合は環境破壊といった視線である。これらが、地域との個人的なつながりを示す写真のなかに混在する。公的な視点と私的な視点のダブルスタンダードによって、「町」を捉えている様子がうかがえる。撮影アングルも、成人男性に



写真9 郊外住宅地(成人男性撮影)

のみ俯瞰的な視点から撮影した写真がある（写真9）。「客観的に地域を捉えようとした」と語っている。

ii) 成人女性

子供に関する写真については、成人男性と同じである（写真10）。一方で、郊外居住者の女性は、全体として散漫でストーリー性のない写真となった。この女性は結婚後、仕事をやめて専業主婦となった。郊外住宅地内で日常のほとんどの時間を過ごしているが、家事・育児などで自身の時間を持ちにくいという状況が、写真に投影されていると思われる。居場所のなさ、アイデンティティー確立の困難さをうかがわせる。

iii) 成人女性／大学生／子供

成人男性以外の撮影者は、郊外・農村部に関わりなく自宅の室内空間を撮影している。

「町」というテーマに対して、室内空間がかなり大きな要素であることがわかる。公的な視線よりも私的な視線が優先し、「町」を行動の様式や範囲を軸に捉えようとしている姿がうかがえる。

iv) 大学生

レジャー施設の内部空間、アルバイト先の雑居ビル、友人の部屋など私的な関係のみに基づき、郊外空間のごく一部を切り取っている点に特徴がある。歴史や社会問題といった社会的視点は希薄で、写真の大半を友人を撮ることに費やした学生もいる（写真11）。郊外空間の特性よりも、撮影者の帰属する集団の行動範囲や様式が優先して、それが場所意識の生成に大きく関与している様子が見えてくる。同時に、自然を感じさせる写真がまったくないことも、大学生の特徴である。



写真10 住宅地内の小学校（成人女性撮影）



写真12 バスケットゴール 一地域内
（小4 男児撮影）

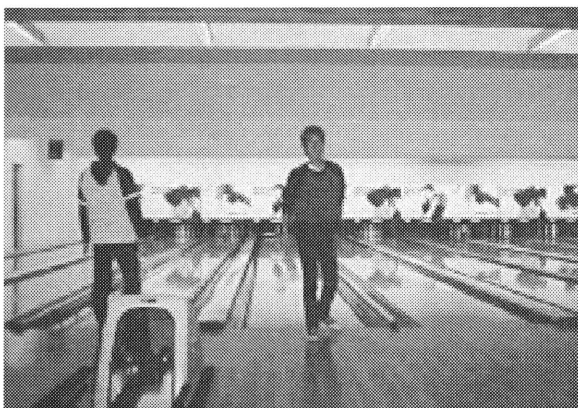


写真11 ボウリング場と友人（男子学生撮影）



写真13 バスケット練習 一地域外（同上）

v) 子供

撮影者である子供の年齢が下がるにつれて、写真に家族が登場する頻度が高まる（大人の場合も、撮影者の子供の年齢が下がるにつれ家族が多く登場する）。次に、撮影者の通う学校・幼稚園がかならず写真に登場する。それらの集団を媒介とした場所構築が行なわれている様子がうかがえる。小学生男児は、自身がバスケットボールの練習に通う場所として、居住区域から離れた都心部の施設も撮影している（写真 12 と 13）。

また、子供たちの写真には、バス等の交通機関、公衆電話等の通信設備が頻繁に登場することも特徴的である。コミュニケーションのための装置が、場所意識の生成に関係していると思われる。

vi) 大学生・子供

大学生 3 人と小学生男児は、撮影に当たって交通機関で移動した。居住地近隣とは離れたエリアをも「私の暮らす町」と認識している。物理的な空間領域よりも、自身の帰属やアイデンティティ、行動様式に基づいた意識のなかの空間領域を優先している様子がうかがえる。

vii) 中学生

居住する住宅地の街路、建物などを撮影している。撮影者自身が現在および過去に接してきた住宅地の空間(写真 14)を撮ったもので、「思い出はあるが、特に思い入れはない」という。人物写真は見られない。



写真 14 昔遊んだ公園（中 2 男子撮影）

ことがわかる。職住の接近や地域内での役割分担（例：豊岡市農村部の成人男性は町の消防団員など）がその背景にあり、地域社会と密接に関係した装置を通して「場所」の生産がなされている。ただし過疎化が「場所」の再生産を阻害しているという側面もある。また、ここでは地域（集落）内での情報ネットワークは比較的緊密で、地域外に対しては個人や集団（学校や近隣関係、家族など）よりも、地域全体として向かい合っている面が強い。写真では農村的な景観が意図的に強調され、「都市対農村」という構図が撮影者の意識のなかにあることがわかる。

一方、郊外では地域社会と密接なつながりをもつ装置は少なく、写真にも地域性が強調されることはない。撮影者は自らの属する集団（学校やサークル、友人関係、家族など）を重視している。その集団的アイデンティティや行動パターンに応じて郊外空間の一部を切り取り、これを「私の暮らす町」として認識している。したがって、同じ郊外空間であっても各個人によって非同質的な「場所」が形成されている。

地域内でのコミュニケーションという点では、全体的な情報ネットワークは希薄（集団外の他者との交流はほとんどない）だが、集団内でのそれはきわめて緊密で強固である。したがって、他の地域（外部空間）に対して

6. 意識のなかの郊外空間

郊外および農村部における写真の特性、さらに属性による写真の特性を述べてきた。地域や属性にかかわらず、居住者にとっての地理的空間は客観的なものとして現われるよりも、意味をもった主観的なものとして存在することが写真からうかがえる。

農村部では、撮影者たちが家庭と同時に、地域社会に根ざした空間を強く意識している

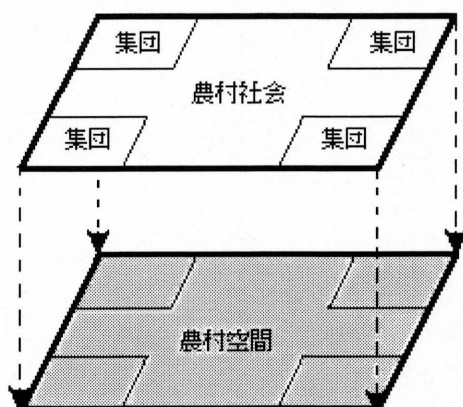
は個人や集団単位での接触が基本となり、地域全体として対処することは稀である。この情報ネットワークの形が、空間把握にも反映されている（第1図）。

こうした集団的アイデンティティーに基づく空間を「テリトリー」と呼ぶならば、撮影者にとっての郊外空間はテリトリーの内側と外側に分断されている。郊外居住者の撮影した領域は基本的にテリトリーの内側にある空間であり、そこで「場所」の生産が行なわれていると考えられる。不可侵領域を示す看板、他者の存在の欠落といった郊外写真の特性は、こうした場所意識を逆説的に物語っている。

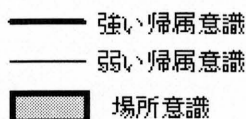
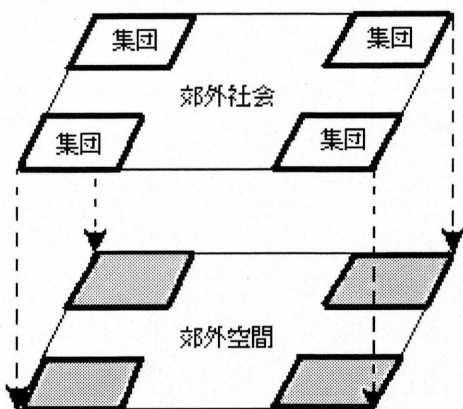
ただし、テリトリーを支える集団的アイデンティティーは、社会的なものであるがゆえに多様かつ可変的で、時間の経過とともに大きく変化する。その変化に応じて、空間内のテリトリーもきわめて可変的なものとなっている。たとえば、小さな公園の写真（写真14）を撮影した中学生は「以前はここでよく遊んだが、いまは足を踏み入れることはない」と話す。郊外住宅地では一貫した場所意識の形成が困難であることがうかがえる。大人の場合も、自身の子供の成長とともに立ち寄り先が大きく変化したという声がある。

大学生や子供の場合、集団的アイデンティティーが地域への帰属性と重ならないケースが多い。そのため、空間把握においても地域社会という視点を欠き、近視眼的になっている面がある。その一方で、これらの集団によって地域社会を越えた外部社会との交流が行なわれ、この交流を通して逆に集団への帰属意識が地域的アイデンティティー（あるいは場所への愛着）に結びつくケースもある。たとえば小学校4年生男児は、所属する地域のバスケットボールチームの対外試合を通して居住地の特性や空間を意識する面がある。外部との接触によってはじめて、集団が「場所」と一体化し、場所意識の再生産装置としても機能しているのである。

農村社会と農村空間



郊外社会と郊外空間



第1図 空間に投影される社会
—帰属意識と場所意識—

これに対して、郊外空間への客観的（社会的）な視点をもつ成人男性は、仕事などを通じて外部社会と密接に関わりながら、写真にそのつながりが表現されることはない。地域と仕事との間に接点のないことが大きな要因であると考えられる。したがって、個人的には居住地（郊外空間）への愛着はあっても、その「場所」意識が集団的に再生産される構

造あるいは社会装置はない。以上のように、郊外居住者はそれぞれの帰属集団内におけるコミュニケーションを通して、「場所」の生産を行なっている様子がうかがえる。しかし、その再生産はきわめて困難な状況にある。

7. おわりに —結びにかえて—

郊外および農村における地域社会と地域空間の関係を、第1図で示した。農村では地域全体としてのアイデンティティーが基盤となり、これが空間に投影されて場所生成につながっている。外部空間との関係は地域社会全体が一つの結節点として機能し、各集団（個人）につながる構図である。一方、郊外では地域内の各集団を通して形成された集団的アイデンティティーが空間に投影され、集団ごとに異なる場所生成がなされている。さらにこれらの集団または個人が直接、外部空間との結節点となり、地域につながっている。ただし各集団と地域社会全体との関係は希薄である。すなわち郊外空間の場合、居住者たちはその空間内で個別に「場所」を生産しているが、属性や帰属集団の違いによって、場所の特性やその強度には大きな差が生じている。加えて、その「場所」が再生産されるという循環構造はない。

以上、写真投影法によって、「社会的なもの」が空間に反映される形で、場所生成がなされる様子を明らかにしてきた。ただし、地域社会＝地域空間という図式は、郊外では成立しにくい状況にある。郊外にはその空間に重なりあう単一の社会システムが存在しないからである。その代わりとして、多様な小集団がモザイク状に重なりあって、郊外空間を埋めている。いわば郊外空間と内部集団の関係は、個人主義的な核家族スタイルを類推させる。こうした人と人との関係図式、集合のあり方が空間把握に反映され、それが場所生成に大きく作用していると考えられる。

付記

本稿は神戸大学大学院総合人間科学研究科に2003年1月に提出した修士論文の一部を加除修正したものである。ご指導いただいた澤宗則助教授にあらためて深く感謝の意を表する。また、本稿の一部は2005年7月の兵庫地理学協会において口頭発表を行なった。

注

- 1) ホンマタカシは東京郊外を撮った写真集で1998年度木村伊兵衛賞受賞。米田知子は2003年「兵庫県くすのき賞」を受賞。両氏の写真は下記URLを参照。
<http://images-jp.amazon.com/images/P/4916017854.09.LZZZZZZZ.jpg>
<http://www.shugoarts.com/photo/yoneda/w-yo-09.jpg>
- 2) 1975年、米ニューヨーク州ロチェスター市のジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館で「ニュー・トポグラフィクス」展が開催された。副題は「人間が変えた風景の写真」で、10人の写真家が出品。人工化する風景を対象とすることで、従来の美意識を乗り越えようとした。
- 3) 小学4年生の男児はしばしば訪れる近所の公園に撮影に行こうとして、父親に1人では危険だからと止められている。ふだんの遊び場でさえ異質な空間の要素をもつ。
- 4) 生産システム（労働）に特徴的な社会関係を軸とした「生産空間」に対比されるものとして、家事や育児など家庭を軸とした労働力の再生産を担う領域を「再生産空間」と呼ぶ。影山穂波は再生産空間に位置づけられてきた女性が、ジェンダー化された空間に異議を申し立て、主体的にジェンダー関係を組み替えていくダイナミズムの存在を指摘している。しかし、写真からはそうしたダイナミズムは読み取れない。
- 5) 郊外空間で撮影された写真に登場する人間は、子供だけである。大人の姿が登場す

ることはない。写真撮影の許諾を得るだけの関係が存在していない。

文献

- 伊藤俊治 (1992) : 『20 世紀写真史』, 筑摩書房, 277p.
- 影山穂波 (2004) : 『都市空間とジェンダー』, 古今書院, 2-40p.
- 加藤典洋 (1990) : 『日本風景論』, 講談社, 284p
- 田中純 (2000) : 『都市表象分析 I』, INAX 出版, 423p.
- トゥアン, イーファー, 山本浩訳 (1988) : 『空間の経験—身体から都市へ』, 筑摩書房, 424p.
- Yi-Fu Tuan (1977) : *Space and Place*
- 野田正彰 (1990) : 『写真に映る心の世界 —写真投影法入門—』, 京都新聞社, 20p.
- 広原盛明 (2001) : 『開発主義神戸の思想と経営—都市計画とテクノクラシー』, 日本経済評論社, 18p.
- ベルク, オギュスタン, 中山元訳 (2002) : 『風土学序説 文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』, 筑摩書房, 432p,
- Augustin Berque (2000) : *Écoumène: Introduction à l'étude des milieux humains*
- ミンコフスキー, ウジェーヌ, 中江育生・清水誠訳 (1972) : 『生きられる時間(1)現象学的・精神病理学的研究』, みすず書房, Eugene Minkowski (1933) : *Le temps vécu: études phénoménologiques et psychopathologiques*
- 吉原直樹 (1993) : 『都市の思想 空間の再構築にむけて』, 青木書店, 318p
- レルフ, エドワード, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 (1991) : 『場所の現象学——没場所性を越えて』, 筑摩書房, 341p. Edward Relph (1976) : *Place and Placelessness*

(おおにし あきひこ・経済ジャーナリスト)